

家庭への包摂と逸脱

——与謝野晶子と三越——

藤 木 直 実

一 主題としての出産、思想としての出産

生涯に五万首の短歌を詠んだとされる与謝野晶子は、一回の出産を経験し二三人の子を生んだ多産の人でもあった。なかでも一九一一（明治四四）年二月、晶子三四歳¹⁾の折の二度目の双子出産は、一児を死産、逆子であったために大変な難産で、自身も死を覚悟したことが第一〇歌集『青海波』²⁾収録歌群にみえる。関連詠群二六首のうち冒頭五首を引く。

十界に百界にまだ知らぬこと一つあるごとし身ごもりしより
不可思議は天に二日のあるよりもわが體に鳴る三つの心臓
この度は命あやふし母を焼く迦具土ふたりわが胎に居る
生きてまた帰らじとするわが車刑場に似る病院の門
己が身をあとなく子等に食はれ去る蟲にひとしき終ちかづく

『青海波』は欧州外遊に出た寛を激しく慕う（男行くわれ捨て、行く巴里へ行く悲しむ如くかなしまぬ如く）（飽くをもて恋の終と思ひしに此さびしさも恋のつづきぞ）などをおさめ、『みだれ髪』

と対比されることも多い。しかしながらこれらの妊娠出産関連詠は、同一主題詠がまとめて置かれて集中とりわけ目を惹くばかりでなく、発表順とは異なる配列が施されて構成意識がうかがわれるものでもある。「晶子に、出産と子育ては切り離せないテーマであると思うが、歌の表現素材として扱いは少ない」という指摘を踏まえるなら、これら二六首の存在は晶子の全歌業中でも特筆されるべきだろう。苛烈な体験の表出をいまし引用する。

悪龍となりて苦み猪として啼かずば人の生み難きかな
蛇の子に胎を裂かるゝ蛇の母そを冷たくも時の見つむる
その母の骨ごとく砕かるる苛責の中に健き子の啼く
あはれなる半死の母と息せざる児と横たはる薄暗き床
死の海の黒める水へさかしまに落つるわが児の白きまぼろし

このときの経験は随筆「産褥の記」⁴⁾にも迫力の筆致で綴られた。「産む前後の母体の様相、病院生活の実相を赤裸々に描写したもので、まるで自然主義の小説を読むような感じの場面が展開されている」と評されている⁵⁾。異常分娩にそなえて病院での出産が選択され

たが、これは晶子にとって人生初めての入院であったという。以下は母体への負担をめぐる記述である。

産前から産後へかけて七八日間は何も一睡もしなかった。産前の二夜は横になると飛行機のような形をした物がお腹から胸へと上る気がして、窒息するほど呼吸が切ないので、真直に坐った儘呻き呻き戸の隙間の白むのを待つて居た。此前の双児の時とは妊娠して三月目から大分に苦しさが違う。上の方になつて居る児は位置が悪いと森棟医学士が言はれる。其児がわたしには飛行機の様な形に感ぜられるのである。わたしは腎臓炎を起して水腫が全身に行き亘つた。呼吸が日増に切迫して立つ事も寝る事も出来ない身になつた。わたしは此飛行機の為に今度は殺されるのだと覚悟して柳博士の病院へ送られた。

生きて復かへらじと乗るわが車、刑場に似る病院の門。
と云ふのがわたしの実感であつた。

長い引用になつたが、一段落を省略せずに示した。この時期、散文ジャンルにおいて擬古文から言文一致体への移行期にあつた晶子の、文体完成がみとめられる。「自然主義の小説を読むような感じ」に加えて歌物語にも似た体裁をとっていること、組み入れられた歌に句読点が施されていることが注目される。歌を文に準ずるものとして扱い、地の文との連繫を試みたのもあろうか。⁸⁾

産後の子宮収縮の痛みが「鬼の子が爪で幾つもお腹に引掛つて居る気がして、出た後までわたしを苦めることかと生まれた児が一途に憎く」と表現されているほか、死児への言及は「親子の情愛と云

ふものも斯う云ふ場合には未だ芽を萌かない」「産後の痛みの劇しいのと疲労とで、死んだ子供の上を考へて居る余裕は無かつた」「實際其場合のわたしは、わが児の死んで生まれたと云ふ事を鉢や茶碗が落ちて欠けた程の事にしか思つて居なかつた」といった調子で、いわゆる母性神話と隔絶した非情なまでの実感を吐露している。反動的ともみなされる過激さである。初出誌は『女学世界』、若い読者たちはこれをどのように受け止めたのだろうか。

随筆終盤では「婦人問題を論ずる男の方の中に、女の体質を初から弱いものだと見ている人のあるのは可笑しい。さう云ふ人に問ひたいのは、男の体質はお産ほどの苦痛に堪へられるか。わたしは今度で六度産をして八人の児を挙げ、七人の新しい人間を世界に殖した。男は是丈の苦痛が屢々せられるか。」と、女性を「脆く弱い」と概論する「傾向および」「其概論を土台にして男子に従属すべき者と断ずる」論調に反旗を翻し、挑発的な一首「男をば罵る。彼等子を生まず命を賭けず暇あるかな。」が投じられている。自らの体験と実感に立脚した晶子のフェミニズムは、以後、詩歌の量にほとんど匹敵する量であるとも言われる、旺盛な評論活動として展開してゆくことになる。

二 家庭への解放と女性の国民化

前節でみたように晶子の思想は自身の多産に裏付けられて揺るぎない。随筆「産褥の記」は以下のように結ばれる。

わたしは野蛮の遺風である武士道は嫌ですけれど、命がけで新しい人間の増殖に盡す婦道は永久に光輝があつて、かの七八

百年の間武門の暴力の根底となつて皇室と国民とを苦しめた野蠻道などとは反対に、真に人類の幸福は此婦道から生じると思ふのです。是は石女の空言では無い、わたしの胎を裂いて八人の児を淨めた血で書いて置く。

日本の女に欧米の例を引いて結婚を避ける風を戒める人のあるのは大早計である。日本の女は皆幸福なる結婚を望んで居る。剛健なる子女を生まうと準備して居る。

「武士道」が「野蠻の遺風」すなわち「暴力」として退けられ、因習打破の力強い主張は女性賛美として展開されるが、その根拠として挙げられているのは出産能力のみである。「武士道」の否定が「婦道」すなわち別のイデオロギーの提示に結びついているばかりでなく、「皇室と国民」、さらには「人類」の幸福に接合されていく。「日本」の「女」を「幸福なる結婚」と「剛健なる子女を生」むことに包摂しようとする高らかな宣言は、自身が「石女」ではない事実を支えられている。

ここでの晶子の思考は、生めない・生まない女を不可視化し抑圧しかねない危うさをとまなう。結婚と出産を直結する発想は、婚姻外の妊娠出産を排除することにもつながるだろう。こうした文脈にもとづくとき、あらためて注目されるのが、随筆の前半部にみえる次の一節である。

いつも産をして五日目位から筆を執るのがわたしの習慣になつて居たが、今度は病院へ這入らねばならぬ程の容体であつたから後の疲労も甚しい。其れに心臓も悪い、熱も少しは出て居

る。其れで筆を執ろうなどとは考えないけれど、じつと斯うして寝て居ると種種の感想が浮ぶ。(中略)その中で小説が二種ばかり出来た。一つは二十回ばかり出来てまだ未完である。其等は暗誦して忘れない様にして居るが、歌の形をして浮んだ物丈は看護婦さんの居ない間を見計つて良人に鉛筆で書き取つて貰ひ、約束のある新聞雑誌へ送つて居る。せめて側にある雑誌でも読みたいのであるが、院長さんの誠めを嚴格に執り行ふ看護婦さんに遠慮して、婦人雑誌や三越タイムスの写真版の所ばかりを観るのを楽みにして居る。(傍線引用者)

執筆も読書も禁じられた産褥の晶子の限られた楽しみとして、雑誌のクラブページを見ることが特記されている。晶子は何を夢想していたのだろうか。引用中にみえる「小説」に相当するとおぼしい作品「宮子」を参照しよう。表題はヒロインの名、その夫「大木さん」をはじめとする周辺人物が登場する三人称小説で、常より重いお産のために入院した宮子が一児は死産の双生児を出産するという梗概である。「産褥の記」と同一の体験に取材することは明らかだが、しかしその筆致にはかなりの懸隔がある。ヒロイン宮子は、陣痛の具合を尋ねられれば赤面し、夫を頼つて涙を流し夫に甘えて泣き声をあげる、言つてみればかわいいた女として造型されている。また、宮子は二八歳、三児の母で、このたびは第四子と五子の出産に臨むとされており、作家の実際とは異なる設定である。

江種満子はこの小説について、「その語り方から想像されるように、出産を私的感傷に流した結晶度の低いものとどまり、同じ出産小説でも後続の水野仙子に遠く及ばない」との評価を下し、「妻

を視点人物に仕立てている」点およびその妻の造型に要因を見出した¹⁰。江種の述べるように、語りの視点は宮子に寄り添い、彼女の認知の範疇にある事柄が展開されている。ただし、以下に引くとおり例外的な叙述も存在する。

牛乳が嫌ひであるとも云はず、横になつて居るのが呼吸困難で苦しいとも云はずに辛抱しているかと思ふと、大木さんは妻が可愛さうでならない。大木さんが二十四で、宮子が十八の歳に一緒になつてから足掛十一年の間二人は口争ひ一つしたことのない仲の好い夫婦である。今も初々しい処のなくならない妻を、十歳の子の母親と思ふことは少なくて、何時も二十前後の若い妻と思つて居るのであつた。

ここで語りは宮子の視点から離れ、超越的に夫の内面を代弁している。宮子は美化され夫は理想化されて、夫婦の仲睦まじさが甘やかに強調される。加えて、この夫婦が溺愛する長男は、可愛い声と美しい顔、さらには画才をそなえているという。夫婦間の永続的かつ相互排他的な恋愛感情と、その結晶としての優れた子ども。「宮子」における家族の表象にロマンティックラブレデオロギーの反映を指摘することはたやすい。

近代家族への志向の強さは、語りの審級のみならず、テクストの結構からも見て取ることができる。すなわち、高名な画家に絵を習っているという長男のために、「母様の生命が助かつた祝」として三越で六〇色の色鉛筆を買い与えよう、という夫の台詞で小説は閉じられる。長男が書生とともに神田の文具店や画材店を探し歩い

ても見つからなかった六〇色の色鉛筆は、三越に行けば買うことができるという。ハレの日の消費の場としての「三越」の名が、理想的な中流家庭の表象と結びつけられて示される。事態は、消費への欲動と家族像の理想化が、小説の中で同じ位相にあることを意味する。

近代社会の到来は、「生産する性としての男性」と「消費する性としての女性」というジェンダー分配を生み出したとされる。加えて、「児童」概念の成立によつて、「子どもを大切に、金を掛けて育てる美德」が中・上流家庭の間に広まっていた¹²ことは、家庭における教育者＝消費者としての女性の役割を浮上させた。ここに資本による市場の開拓が接合されたとき、玩具や文具といった子ども向け商品が、都市中間層の欲望の対象として、売る側と買う側の双方から見出されていくことになる。ところで、「宮子」発表当時は、日露戦後から第一次大戦に向かう流れの中での国家的要請として、「儉約」が国民に奨励された時期でもあった。経済の冷え込みを回避するためには、他方で適度な消費も必要とされる。次世代を担う少国民としての「児童の発見」は、児童向け商品の購買行為を担保する論理かつ倫理であった¹³。「宮子」における「色鉛筆」の焦点化には、以上のようなコンテクストを前提することができだろう。

「家族」を単位とした消費の主体となること¹⁴。女性たちは消費への欲望を通じて「国民」になっていったのであり、「三越」はその教化の装置でもあった。小説「宮子」における「三越」のイメージはその機構を今日に伝える。翻つて発表当時にあつては、読者たちと欲望を共有し、あるいは感染させていく、媒介として機能していたと言えよう。

三 与謝野晶子と『台湾愛国婦人』

ところで、「宮子」は講談社版定本全集未収録作品で、岡田八千代編『閨秀小説十二篇』（博文館、一九二二年三月）所収本文は再録と推定¹⁵できるが、初出は長らく未詳であった。『與謝野晶子評論著作集 第十六卷』（龍溪書舎、二〇〇二年一月）に収録、本文末尾の付記によれば初出は『台湾愛国婦人』一九一一年二月号であるという。評論著作集解題にも「※初出誌未見のため、岡田八千代編『閨秀小説十二篇』博文館、一九二二年三月、を底本とした。」¹⁶という但し書きが付されているように、初出誌は、日本国内においてはもとより、台湾における所蔵状況もきわめて限定された稀覯本である。そこで以下では、『台湾愛国婦人』¹⁶についての網羅的な研究を進行中の上田正行および下岡友加による成果に依拠して、当該誌の性質および特徴を把握しておきたい。

『台湾愛国婦人』は愛国婦人会台湾支部による機関誌で、一九〇八（明治四一）年一〇月から一九一六（大正五）年三月まで刊行された。第二巻以降は廃刊まで月刊雑誌であった。最多配布部数は年間八六一七五部（一九一四年）、刊行四年目には三〇〇頁近くの分量を備えて当時の雑誌として大部であるばかりでなく、日本統治初期の台湾において相当な資金の投入されたメディアであったことは、日本国内の『愛国婦人』（一九〇二年三月～一九四二年二月）が一九一〇年まで新聞形態であったことと比しても明らかである。

戦死者の遺族や傷痍軍人の救護および慰問などを目的として一九〇一（明治三四）年に創設された愛国婦人会は、一九〇五年、台湾支部を台湾総督府構内に設置する。表向きは婦人団体の体裁を取る

が男性官吏によって活動方針が定められ、在台湾会員に特に求められたのは警察官吏による山地討伐（いわゆる理蕃政策）への支援、すなわち「蕃人に対し討伐又は防蕃の職務の爲め戦死したる者の遺族又廃兵を救護すること」であった。『台湾愛国婦人』は、山地討伐の成果報告、慰問金や慰問袋の募集、慰問活動の様子、収支報告等々を掲載して、台湾統治初期総督府の政策履行における広告塔の役割を果たした。

加えて、当代一流とされた知識人や著名作家の原稿をも多数掲載して充実した誌面は、会員獲得に寄与するとともに愛国婦人会およびその後ろ盾としての台湾総督府の権威づけとして機能し、また、帝国日本の領土拡大にともなって日本文学の市場が広がってゆく様相を示している。与謝野寛・晶子夫妻は、文芸欄に数多くの作品を定期的に寄稿したばかりでなく、自筆原稿や家庭の写真や口絵に提供して、最も重要な作家に数えられる。対象読者が女性である本誌においては、夫妻のうちでも特に「晶子が見られ、読まれる対象として高い商品価値を持っていたこと、またそれを積極的に利用しようとする雑誌編集・運営側の意図は明白¹⁸」であった。

以上を踏まえれば、小説「宮子」は、掲載誌『台湾愛国婦人』を媒介することで、帝国の百貨店としての三越の表象を植民地の人々にまで伝播したとみなすことができる。ここでふたたび「産褥の記」における「三越」にかかわる記述を確認しよう。産後の身体を養う晶子は「婦人雑誌や三越タイムスの写真版の所ばかりを観るのを楽しみにして居る」とある。婦人雑誌の巻頭グラビアに掲載された皇族などのイメージが、二〇世紀初頭の日本における想像上の集団としての「中流階級」を成立させたことは、和田敦彦による『婦人画報』

の精緻な分析によってつとに明らかにされている。ほぼ時を同じくして誕生した三越をはじめとする百貨店が、都市中間層をターゲットにした消費文化の形成を通じて「家庭」概念の流布に関与したことについては前節で述べた。そこに行ってお金さえ出せば、理想の家庭に必要なアイテムを「買う」ことのできる場所。購買力が及ばなければ、陳列された商品を「見る」ことを通じて中流階級への参入を夢想する人々。「三越」とはこうした欲望の作動する場所の謂いであった。さらに、『みつこしタイムス』などの機関雑誌によって、実際に店頭を訪れることの困難な読者にも消費をめぐる快楽は提供される。すなわち、「産褥の記」における晶子は、婦人雑誌や百貨店刊行物の読者の典型としての自身の姿を提示していた。

三越による機関雑誌の展開についてここで簡単に触れておきたい。¹⁹一八九九（明治三二）一月刊行の『花ごろも』は、日本で最初のPR誌、すなわち企業広報誌であると言われるが、その内容は商品カタログとみなすほうが実情にかなう。読み物としての性格をあわせもち、カタログ紹介商品を小説の主人公が身につけるなどしている。写真印刷技術の不熟を補う広告手法であったとされる。同じ年、郵便制度の普及発達にともない、郵便振替による通信販売を開始。『夏衣』『春模様』『夏模様』『水面鏡』『みやこぶり』とその都度誌名を変えて刊行された機関雑誌は通販カタログの性質を担うようになり、いわば移動する百貨店として顧客を拡大した。一九〇三年八月の『時好』より月刊化、一九〇八年六月に後継誌『みつこしタイムス』刊行。一九一一年三月には文芸欄を充実させた『三越』を創刊する。この頃には台湾をはじめとする植民地においても頒布され、通信販売ネットワークは外地にまで広がっていたことが明らかに becoming

る。百貨店をめぐる想像力を外地に伝播する媒体であるという点で、これら百貨店刊行物と小説「宮子」は通底している。

「産褥の記」末尾において「武士道」を「野蠻の遺風」として否定する晶子は、その言説によって自らを近代的主体として立ち上げているとみなされるが、彼女の近代が結婚と出産に収斂されていたことは前節で確認した。「産褥の記」では家族の形成をすなわち「皇室と国民」の幸福であると述べ、「宮子」では理想的な家族の表象と消費への欲動とともに示した彼女が、みずからの家庭の写真を『台湾愛国婦人』口絵頁に提供していることは象徴的である。晶子の思想は、植民地をめぐる政策や運動とあやうい接近をみせている。

四 家庭からの逸脱

——むすびにかえて——

ここまで、与謝野晶子の随筆と小説の分析、特に三越イメージの検討を通じて、出産に立脚した晶子の思想とそこに接合される文脈をみてきた。「産褥の記」と「宮子」における「三越」は、家族を単位とした消費の欲望を喚起する百貨店の戦略に完全合致するものであったが、晶子にはほかに「三越」をめぐる詩、戯曲、小説が存在し、このモチーフをめぐる作者の関心とイメージの振幅を示す。たとえば、詩「空しき日」²²には夫婦の懸隔および消費の快楽の頓挫が描かれ、詩「女は略奪者」²³はその表題どおり夫の収入に依存して買い物に淫する女性を「略奪者」とし、自戒をもこめて批判している。

晶子が小説および戯曲の創作に手を染めるのは一九〇六年からだが、その後七年ほどの間に小説四五篇、戯曲六本を発表する多作ぶ

りである。石川啄木の日記にみえる「明星の百号千部のうち二百部残ったため、女史が今かいてある小説『不覚』五十回分だけ万朝報に持つて行つて金を貰い、印刷の方など払つたといふ。予は悲しくなつた。」(一九〇八年二月二日)という記述から、生活費のほかに新詩社の資金に充てたことが知られる。これらは自伝的要素の強いものをのぞけば、大学教授、文学者、画家、医者などを題材にしたものが多い。戯曲執筆にあつたのは伊原青々園の勧めによつて『スバル』に寄稿し、また、森鷗外の助言を受けたと、談話「妾と芝居」で述べている。²⁴「妾と芝居」には鷗外「仮面」への言及もみられ、晶子の創作が鷗外のいわゆる「学者小説群」と関心を共有することがうかがわれる。

なかでも戯曲「損害」²⁵の梗概は次のようなものである。法学博士高石伸の妻和代は、ある日夫の教え子の弁護士に電報を打ち、三越で会い、ともに食堂でコーヒーを飲んだことを夫に告白する。一七歳で結婚し、二五歳まで九年のあいだ夫の「囚われ人」になっていると感じていたこと、自分の行為が夫に「損害」を与えたと思つていたことを、和代は夫に告げる。

「損害」が掲載されたのは一九〇九年二月の『スバル』、その翌月には同誌に鷗外最初の本格口語体小説「半日」が発表されている。周知のように「半日」は妻に手を灼く夫を夫に寄り添つた視点で描く。「半日」に先立つ「損害」は夫に不満を抱く妻の行動に焦点化して、あたかも対照をなすかのようである。姦通すれすれのドラマの舞台として選択されているのが「三越」で、この設定からは、買い物をするための外出経験の蓄積が中流家庭の主婦に女中を伴わない単身行動を習得させていくこと、都市の盛り場としての百貨店が、

訪れる人々に一定程度の匿名性を保証しつつ、消費に加えて劇場型の快楽をも提供していることがうかがえる。述べてきたように、百貨店の販売戦略は家庭を単位とした消費の欲望の主体として女性を主体化させたが、消費行動の反復は彼女とその欲望を家庭の外部にいざなうにいたるのである。

また、一九一一年三月、『三越』創刊号文芸欄に晶子が寄稿した「呂行の手紙」は、実在の女義太夫をモデルとし、彼女が関係者に宛てた八本の手紙を並べた体裁の書簡体小説である。作家の言文一致体移行期の作品としてまずはその八本の手紙で使い分けられている文体が目目されるが、複数のパトロンおよび情人のそれぞれとの関係性、彼女が「だんだん女が男の心持になる」外科手術を受けるという設定、女性パトロンへの同性愛的葛藤が書き込まれているなど、婚姻に結びつかない女性の欲望の種々相、および、セクシュアリティの揺らぎをモチーフとして興味深い。この作品については別稿を用意したい。

一九一二年五月、晶子は夫を追つて単身パリに渡る。その際には鷗外により三越の専務取締役日比翁助を紹介され、日比から洋行補助費一〇〇〇円の贈与を受けている。²⁶寛を恋う晶子の情念はしがらみの一切を振り捨てさせるほどに烈しく、渡欧は彼女に新しい創作の境地をひらいてゆく。

注(1) 作家本人をモデルとする作中人物の年齢との対照のために、ここでは

数え年を用いる。なお、与謝野晶子は一八七八(明治一一)年二月七日に生まれ、一九四三(昭和一七)年五月二十九日に没している。

(2) 一九一二(明治四五)年一月、有朋館。

- (3) 東直子「与謝野晶子を演じる者としての与謝野晶子」『ユリイカ』三二一一、二〇〇〇年八月。ただしこれは、晶子個人の傾向というよりは和歌（短歌）というジャンルの性質に起因している。相聞（あるいは男女の対関係）は古代から現代にいたるまで主要モチーフであり続けている。母子関係が短歌の主題として定着するのには、五島美代子の登場を待たねばならない。
- (4) 初出タイトル「雑記帳——産褥での雑感——」（『女学世界』一九二一年四月）、のち「産褥の記」として『一隅より』（金尾文淵堂、一九二一年七月）に所収。
- (5) 木俣修「解説」（『定本 与謝野晶子全集 第十四巻』講談社、一九八〇年三月）
- (6) 関礼子は「文におけるジェンダー闘争」（『青鞥』という場——文学・ジェンダー・〈新しい女〉——森話社、二〇〇二年四月）において、晶子の言文一致体への移行期を「産屋日記」（『明星』一九〇六年七月発表、執筆は一九〇三年六月とされる）から「産屋物語」（『東京二六新聞』一九〇九年三月一七日（二〇日）の六年間に見出している。
- (7) 引用文中の短歌はこの随筆中最初の詠である。劇的效果を高める配置とみなされよう。
- (8) この点については拙稿「孕む身体——女性作家の描いた〈妊娠〉の近代——」（『イメージ&ジェンダー』四、二〇〇三年二月）において指摘した。
- (9) 『毎日電報』『新日本』『萬朝報』『東京日日新聞』などに掲載され『青海波』におさめられた歌を指す。
- (10) 江種満子「知としての〈女〉の発見」（『青鞥』を読む）『學藝書林』一九九八・一一）
- (11) 当該企業の正式名称が「三越」となるのは一九二八年で、それ以前には「三井呉服店」「三越呉服店」など名称変更や改組が重ねられているが、

本稿では小説中の名称にならない、また一般になじみの深い、「三越」で統一する。

- (12) 神野由紀『子どもをめぐるデザインと近代——拡大する商品世界——』（世界思想社、二〇一一年三月）。
- (13) 瀬崎圭二「日露戦争と消費文化——百貨店の誕生と承認——」（『流行と虚栄の生成——消費文化を映す日本近代文学——』世界思想社、二〇〇八年三月）を参照。
- (14) 百貨店による消費文化の形成については以下を参照。初田亨『百貨店の誕生・明治大正昭和の都市文化を演出した百貨店と勤工場の近代史。』（三省堂、一九九三年二月）、神野由紀『趣味の誕生——百貨店が作ったテイスト——』（勁草書房、一九九四年四月）、山本武利・西沢保編『百貨店の文化史——日本の消費革命——』（世界思想社、一九九九年二月）。
- (15) 『閨秀小説十二篇』は、配列順に、与謝野晶子「宮子」、水野仙子「四十余日」、長谷川時雨「其一幕」、尾島菊子「妹の縁」、田村とし子「機運」、岩田百合子「実家」、森しげ女「おはま」、国木田治子「モデル」、生田嘉子「路傍の人」、小栗壽子「多事」、木内鏡子「行末」、岡田八千代「同居人」をおさめる。未詳の作家作品を除けばすべて一〜二年前に発表されたものの再録である。
- (16) 以下、『台湾愛国婦人』にかかわる記述は、特に、下岡友加「雑誌『台湾愛国婦人』の史的位置——新資料・第六十巻を中心に——」（『日本研究』二二、二〇〇九年五月）、下岡友加「雑誌『台湾愛国婦人』の性格——プロバガンダ、そして近代文学発生の場として——」（『県立広島大学人間文化学部紀要』五、二〇一〇年二月）に依拠している。そのほかに、上田正行「資料『台湾愛国婦人』文芸関係主要記事」（『中心から周縁へ——作品・作家への視覚——』梧桐書院、二〇〇八年八月）、上田正行「講演『台湾愛国婦人』という雑誌」（『言語と文芸』一二五、二〇

○九年三月、上田正行（研究代表）『台湾愛国婦人』の研究（国学院大学、二〇一四年二月）等を参照した。

- (17) 主な寄稿者は、三宅花圃、尾島（小寺）菊子、水野仙子、国木田治子、原田琴、長谷川時雨などの女性作家、土屋文明、島木赤彦、窪田空穂、伊藤左千夫、斎藤茂吉などの歌人、跡見花隠、安井てつ、羽仁もと子、鳩山春子、広岡浅子、棚橋純子、山脇房子、矢島楯子、宮田修、三輪田元道などの女子教育従事者、そのほかに、阿部磯雄、青柳有美、沼田笠峰、芳賀矢一、高島米峰、坪内雄蔵、押川春浪、石橋思案、生田長江、後藤宙外、泉鏡花、徳田秋声、真山青果、内藤鳴雪などが名を連ねている。

- (18) 下岡友加前掲「雑誌『台湾愛国婦人』の史的位置」。

- (19) 和田敦彦「読むということ——テキストと読書の理論から——」（ひつじ書房、一九九七年一〇月）。

- (20) 『株式会社三越一〇〇年の記録』（株式会社三越、二〇〇五年五月）、土屋礼子「百貨店発行の機関雑誌」〈前掲『百貨店の文化史』所収〉、『流行をつくる——三越と鷗外——』（文京区立森鷗外記念館、二〇一四年九月）等を参照。

- (21) 晶子と女兒二人、門生三人の写真が、『台湾愛国婦人』六〇巻に掲載されているという。下岡友加前掲「雑誌『台湾愛国婦人』の史的位置」を参照。

- (22) 『早稲田文学』一九二一年一月。

- (23) 『横浜貿易新報』一九二七年二月一六日。

- (24) 「妾と芝居」（歌舞伎）一〇七、一九〇九年六月。

- (25) 『スバル』一九〇九年二月。

- (26) 金子幸代は、「平日」と「損害」の影響関係を重視している。金子幸代『鷗外と女性』（大東出版社、一九九二年一月）を参照。

- (27) 「三越」には晶子をはじめ多数の女性作家が寄稿している。その事情に

ついては、小平麻衣子『女が女を演じる——文学・欲望・消費——』（新曜社、二〇〇八年二月）、瀬崎圭二前掲『流行と虚栄の生成』に詳しい。

- (28) 森鷗外『明治四十四年日記』（『鷗外全集第三十五巻』岩波書店、一九七五年一月）を参照。

- (29) たとえば、『新訳源氏物語』の校正を森鷗外が代行した事実などが挙げられよう。

付記

*与謝野晶子作品の引用に際しては『定本 与謝野晶子全集』（講談社、一九七九—一九八一）および『与謝野晶子評論著作集』（龍溪書舎、二〇〇一—二〇〇二）を使用し、必要に応じて初出を参照した。漢字は原則として通用字を用いた。

*本稿の論旨は、拙稿「三越と女性、その欲望のかたち」（『流行をつくる——三越と鷗外——』（文京区立森鷗外記念館、二〇一四年度特別展図録、二〇一四年九月）に基づいている。